

世代間ギャップの理解と子育て支援に関する研究

A Study on Understanding of the Generation Gap and Child-rearing Support

榎 原 尉 津 子 杉 山 佳 菜 子

Itsuko Sakakibara Kanako Sugiyama

小 川 真 由 子

Mayuko Ogawa

(要約)

研究1では、NHK番組「すくすく子育て」から母親と祖父母との関係について探った。時代の変化とともに育児に対する考え方方が変化し、母親、祖父母ともに世代間ギャップを感じていることがわかった。研究2では、母子健康手帳から世代間ギャップを探った。1960年代では結婚、妊娠、出産、家族計画について記されており世代間ギャップに繋がる内容がみられた。研究3では、母子保健推進員に調査を実施したことにより、孫育てや地域の子育て支援にも期待されていることがわかった。結果、祖父母は今の育児を理解すること、サポート役に徹すること。母親は祖父母や家族、子育て支援センターなど他者に頼ることで子育てしやすい環境に繋がると言える。

(キーワード)

世代間ギャップ、祖父母、母子健康手帳、母子保健推進員、子育て支援

1. 問題と目的

安倍内閣の経済財政運営と改革の基本方針によると、少子化対策、子ども・子育てについては、引き続き結婚支援を推進するとともに、社会全体で子育てを支えるため、通勤時間の短縮、テレワークの推進、地域や家庭における子育ての担い手の多様化などの取り組みによる総合的な子育て環境の整備を図り、少子化対策を強化することで「希望出産率1.8」の実現を目指す（内閣府、2019）としている。

2015年4月にスタートした子ども・子育て支援新制度では、働きながら子育てがしやすくなるよう2016年度には企業主導型保育事業や企業主導型ベビーシッター利用者支援事業を創設するなど、離職防止、就労の継続に繋げようとしており、就学前の子どもの教育・保育環境は益々大きく変化していると言える。また、子育て・教育事情の変化を追い続け執筆活動を行っている戸塚（2017）は、社会環境の変化とともに子育ても変化し、小児医学の進歩と赤ちゃん用品の革新により子育て環境はかつてないほど大きく様変わりしていると、昔と今の子育ての違いについて述べている。

そこで研究1では、この子育て環境の変化とともに子育てへの不安や疑問も変化しているのではないかと考え、視聴者の育児に関する疑問や悩みを取り上げるNHK番組「すくすく子育て」で扱う内容を整理し、2000年以降の子育ての常識の変化や子育て世代の関心事についてみることにした。その中でも本稿では、世代間ギャップをみるため子育ての担い手とも言える子育て世代の身近な存在である祖父母世代との関係について検討するため、番組が取り上げた質問内容をみていく。研究2では、世代間ギャップの研究を進めるきっかけとなった番組「すくすく子育て」でも話題になっていたが、妊娠した全ての母親が手にする母子健康手帳からも世代間ギャップをみていく。また1970年以降は、育児書に書かれ

ていた育児を目指し『知識で育児』の時代へと変化していったが、インターネットの普及によりわざわざ育児書を購入する必要もなくなり、簡単に国内の育児情報や海外の育児情報、赤ちゃんグッズを手に入れることができる時代へと変化していった。そこで育児書が出始める前に交付されていた1960年代の母子手帳と1990年代、2000年代と年代別に母子健康手帳に記載されていた内容を比較し、子育て世代と祖父母世代との育児に関する常識の変化をみていく。研究3では、乳幼児の子育てサポートに携わる母子保健推進員へのアンケート調査を実施し、子育て世代の悩みや祖父母との関係をみていくことで、母親の離職防止や就労の継続に繋がると考える祖父母世代による子育て支援の重要性を明らかにしていく。

2. 研究1-子育て世代と祖父母世代との関係

(1) 方法

NHK番組学術利用トライアル（番組アーカイブス）を利用して、「すくすく子育て」15年間分（2003年4月11日～2018年9月22日、全677回）の放送を閲覧。その中の祖父母世代に関する放送8回分（2006年8月19日～2017年4月29日）から、祖父母世代に対する質問や悩み、またその逆の立場からの質問や悩みをみることで子育て世代と祖父母世代との関係を検討することとした。

(2) 結果

番組「すくすく子育て」では、2006年8月19日に初めて祖父母との関係に関する内容が放送され、「どうつきあう？じいじ ばあば世代～子育て支援の新しい形～」というタイトルであった。このころの時代の変化としては、女性の社会進出が進み、男性の育児参加が話題になりはじめ、それに伴い仕事・育児・家事をこなさなければならない子育て世代にとっては祖父母の育児サポートが大きな支えとなっていた。しかし放送が2006年から2017年へと進むにつれ、育児に関する情報提供者であった祖父母からスマートフォンやパソコンといった情報機器の利用へと移り変わり、その豊富な知識・情報量が原因となって新たな悩みや不満に繋がっていることも各回の放送内容から明らかとなった。一番多く番組内で取り上げられた質問は、世代間ギャップに関する苦情や悩み、子育て世代と祖父母世代の上手な付き合い方についてなど解決法を求める内容であった。

放送回ごとに質問内容を拾うと、次に挙げる1)～4) のとおりである。

1) 子育てサポートをしてもらっている人、頼りにしている人について

2006年8月19日放送された「子育てサポートをしてもらっている人は？」についてみると、図1のとおりであった。「妻の父・母(57%)」と頼みやすい母親の親族によるサポートが多いことがわかった。また、すくすく視聴者の母親に聞いた「子育てで一番頼りにしているのは？」についてみると図2のとおり「ママの父母(50%)」「ママの友人(13%)」であった。図1と図2からもわかるように夫や夫の両親に子育てサポートを求める母親は少ないとわかった。これらの結果を踏まえ、番組出演者である保育学、発達心理学、看護学に関する専門家から祖父母に対して、育児は誰でも最初は素人であるため嫁に完璧な育児を求めないこと、夫とは育ってきた環境が違うためお互いに価値観の違いがあることは当然のこととして認め合うこと、母親へは世代間交流を一番の目的に地域社会へ参加し、開かれた子

育てをしたほうが良いといった祖父母との上手な付き合い方のアドバイスがあった。

2) 祖父母世代の孫育てについて

2006年8月19日の放送では「じいじ ばあばに捧げる！すぐすく孫育て」と題し、子育て世代と祖父母世代が一緒に孫育てができるよう、以下のとおり『すぐすく孫育て 三か条』の紹介があった。

『すぐすく孫育て 三か条』(原文引用)

- 一、口を出さずに 技を出す (育児の常識は時代とともにかわる。)
- 一、マニュアルより 話し合い (衝突する原因になる。子どもにとってどうしたいかと一緒に考える。)
- 一、ママは ばあばが頼り (ママの愚痴を聞くだけで、精神的な支えになって良い。)

番組内で紹介された三か条の説明からは、祖父母はでしゃばらず、側で見守ることで良好な関係が保たれるということ、育児経験がある祖母は子育てのプロであり心の支えになる大切な存在であることがわかり、悩み多い母親へのサポート役として祖父母世代も孫育てに参加することの重要性が明らかとなつた。

3) 世代間ギャップについて

2007年8月11日、2011年1月8日、2012年12月22日、2017年4月29日の4回の放送では、育児ギャップに関する質問内容が取り上げられていた。その中で、祖父母世代とのギャップを一番感じている内容を拾うと表1のとおりであった。

表1に挙げたように祖父母世代が常識として行ってきた子育てが、小児医学の進歩と赤ちゃん用品の革新により育児に対する考え方が変化してきたことがわかった。

表1. 育児ギャップ 一昔と今の考え方の違い—

育児ギャップ	今の考え方
断乳時期ギャップ	・ミルク（母親とふれ合う）を与える行為は、子には精神的な支えとなっている。同じくらいの子どもを見て、自分からやめるという気持ちが芽生えれば、自立が育くまれる。
抱き癖ギャップ	・抱かれると子どもは安心し、精神的に良い。
さ湯ギャップ	・さ湯ではなく、栄養豊富な母乳やミルクで良い。
ベビーパウダーギャップ	・汗腺に詰まる。気管支に入るので気を付ける。
その他	・歩行器（歩行の妨げになる） ・日光浴（紫外線による健康への悪影響） ・うつぶせ寝（乳幼児突然死症候群）、ドーナツ型枕（首に汗疹、寝返りしにくい）

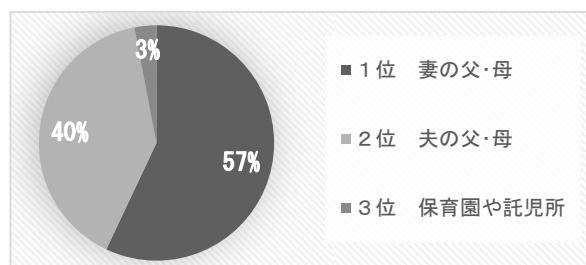


図1. 子育てサポートをしてもらっている人は？
(NHK放送文化研究所2004調査より)

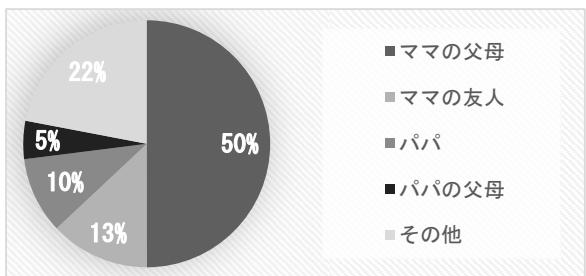


図2. すぐすく視聴者ママに聞いた子育てで一番頼りにしているのは？ (すぐすく.COM調べ)

4) 祖父母世代による子育て支援について

前述した 1) ~3) では、祖父母世代との育児ギャップを中心に取り上げたが、2009 年 9 月 12 日、2012 年 12 月 22 日、2014 年 12 月 6 日、2015 年 11 月 14 日の 4 回の放送では、祖父母世代による「子育ての知恵」の紹介があった（表 2）。

表 2. 祖父母世代が伝授する子育ての知恵

質問内容	祖父母世代の知恵
・子どもはどうすれば走り回らなくなるか。	<ul style="list-style-type: none"> ・店内では、入る前に約束させる。（できたら褒める） ・病院では、静かにお絵かきをさせる。（守れたら褒める） ・ある年齢を過ぎたら、けじめをつけさせる。 ・本当の気持ちを探る。 ・下の子が乳児の場合、上の子中心に接する。
・子どもは寂しいからおっぱいを欲しがるのか。	<ul style="list-style-type: none"> ・「寂しい」と欲しいという気持ちは直結しない。温もりを感じたいため、安心できるものを持たせると良い。違うことに興味が移れば離れていく。
・母親が持つ育児不安や行き詰まりの対処法は？	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の時間をつくる。 ・頑張りすぎない。 ・孤立感が深まってくる時は、周りの協力を得る。

質問内容をみると、母親の誰もが経験している周囲の目が気になる場所（店内、病院など）での子どもの行動に関する悩みが挙げられ、番組内では子育ての先輩からの対処法に真剣に耳を傾ける新米の母親の姿がみられた。また、子どもとの関わりのなかで大切にしていることは、必ず親との約束を子どもができたり、守れたことに対して褒めるということを忘れてはいけないということであった。褒められると大人でも嬉しい気持ちになるが、子どもは褒めてもらおうと頑張ろうとする、その子どもの気持ちは子どもが何歳になっても大切にして欲しいといった声掛けのアドバイスであった。

(3) 考察

子育て世代と祖父母世代との関係に関する放送内容を整理したことで、子育て中の母親の悩みや困りごとの多くはインターネットからの情報や育児書を学校の教科書のように信じ、その通りに子どもが育たないことへの苛立ち、時代とともに変化してきた育児に対して否定する祖父母世代との育児ギャップに関する質問が多いことがわかった。したがって、母親と父親との関係はそれぞれ育ってきた家庭環境が違うということ、祖父母は縁の下の力持ち的な役割でいること、時代が変化し小児医療や赤ちゃん関連グッズも母親の育児負担軽減のために進化してきているということをお互いに理解し合い、またその子どもにあった育児を両者で一緒に考え育していくことがベストな関係であると言える。

3. 研究 2-母子健康手帳からみる世代間ギャップ

(1) 方法

母子健康手帳の歴史（横山、2012）をみると、1942 年に国による妊産婦手帳制度が発足し、1947 年には児童福祉法が施行されたため、1948 年には妊産婦手帳から母子手帳に切り替わったとされている。その後、1966 年には母子保健法が施行され 1967 年には母子手帳から図 3 のように母子健康手帳と明記された手帳に切り替わった。また 1981 年には母子保健法の改正に伴い母親が子どもの成長記録が書き込める方式へ変更となり、1991 年の母子保健法の改正により、都道府県交付から図 4 のように市町村名

(区名)が明記された手帳へと変更となった。このように時代や国の政策の変化にあわせて母子健康手帳も変化してきた。

そこで、研究2では母子健康手帳の内容を比較するため、県が交付し始めた1960年代の母子健康手帳、市・区が交付するようになった1990年代の母子健康手帳、2000年代では日本家族計画協会が厚生労働省の許可を得て発売した外国籍の母親に対応した図5のような6ヶ国語版母子健康手帳をみることで、世代間ギャップに繋がる内容を探ることにした。



図3. 1960年代（三重県発行）



図4. 1990年代（名古屋市発行）

図5. 2000年代（6ヶ国語版）
(一般社団法人日本家族計画協会発行)

(2) 結果

母子健康手帳の主な内容は、妊娠中の経過、乳幼児期の健康診査の記録、予防接種の記録、乳幼児の身体発育曲線である。1960年にも乳児期の経過（保健指導の記事）として保健指導を受けた時期、栄養状態、精神状態、運動機能、発達状況についての記入するページはあるが、そのページには「育児心得」が明記されており、世代間ギャップに繋がる内容（破線箇所）がみられた。以下にその内容を示す。

「育児の心得」より一部抜粋

- ・こどもが立派に育つためには、両親の愛情が一番です。
- ・母乳は赤ちゃんのためにもっともすぐれた栄養です。できるだけ母乳で育てるようになります。
- 母乳の出がわるかったり不足のようなら、医師その他専門家に相談してください。いいかげんな人
工栄養は失敗のもとです。
- ・乳児にはふつうではわからない病気（たとえば代謝異常）があり、将来、精神や身体に障害をのこすことがありますので、医師に相談しましょう。
- ・新鮮な空気と日光は赤ちゃんを丈夫に育てるために、栄養とともに大切な要素です。
- ・赤ちゃんの順調ながらだの発育は健康のしるしです。体重は生後3~4カ月で生まれたときのおよそ2倍になるのが普通です。
- ・満1才頃には母乳はやめるようにしましょう。必要な栄養が十分とれるよう三度の食事に気をつけましょう。

このように祖父母世代である 1960 年代の乳児期の健康や栄養、子どもとの接し方に関する考え方が今の時代にあった考え方ではないことがわかる。また（石垣、1967）は、母子健康手帳の薬剤広告ページ（図 6）に「親となることの重さ！！」として、この手帳を手にした保護者向けに子どもを産むことの責任と義務、理想の家族計画について述べているが、今の時代にそぐわない、世代間ギャップに繋がる内容の記述がみられた。例えば、出産に適した年齢は 25～30 才の間としている。二人目、三人目を産むには 3 年おきに出産するのが望ましい。35 才以上の出産のリスクや父親が定年退職した時にまだ子どもが学業を終えていないと父親の重荷になるなど、今の時代からすると想像もつかない、現代ではハラスメントともとれる内容が母子健康手帳に記されていたのである。

（3）考察

本稿では、世代間ギャップだけを見るため母子健康手帳に掲載されている項目とその内容だけを比較した。1990 年代と 2000 年代の母子健康手帳にはみられなかった結婚、出産、育児に対する考え方が随分違うことがわかり、このことが世代間ギャップに繋がっていると考えられる。そのため、時代とともに変化する出産、育児については昔と今を比較して祖父母世代に伝えていく必要性を感じた。

4. 研究 3-祖父母世代の子育て支援

（1）方法

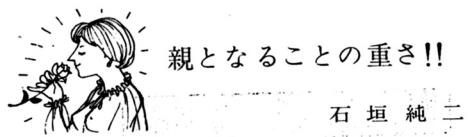
- ・調査協力者：津市母子保健推進員研修会に参加した 35 名（母子保健推進員：経験年数 0～22 年）。

回答者 34 名（回収率 97%）

- ・調査時期：2019 年 10 月

- ・質問項目：「1.子育て中の母親と育児（世代間）ギャップを感じられたことはあるか」「2.子育て中の母親から祖父母との関係（困りごと）について相談をされたことはあるか」「3.祖父母は、子育て中の母親・父親に対してどのような立場でいることが理想だと思うか」「4.子育て中の母親・父親への子育てに関するアドバイス」「5.子育て支援に関して、祖父母世代（または高齢者）に期待すること」の質問に対して回答を求めた。

津市健康福祉部健康づくり課（2018）によると、母子保健推進員は定期的に研修を受け、乳幼児や希望する妊婦の家庭を訪問しながら母子保健制度の説明、心配ごと、育児相談にのっている。また子育て支援ひろばを開催するなどの支援活動を行っている。研修会参加者に母親の様子を尋ねると、育児に関



子どもを産むというのは、大変な責任と義務を伴なうことです。その子の生涯に、幸福と安定と平和を保証できないとすれば、どうして親となる資格はないといわねばなりません。そうした、親となることの重さを十二分に自覚して、英知のうんだ計画性を、妊娠・出産という自然現象に持ちこむのが近代人であるとすれば、近代人の家族計画はつぎの六戒にまとめられると思います。

- ①子どもが一ぱん丈夫に産まれる、母の 25 才から 30 才の間にうみ終ること。
- ②子どもが一ぱん丈夫に産まれてくる 3 年おきの出産にする。上の子が下の子に嫉妬して幼児神経症になったり兄妹仲が冷たくなったりする年子年子を避けるいみでも三年おきがよい。なぜなら、三才児なら母の妊娠中に予備教育をし、赤ん坊への嫉妬を防ぐことが可能だから。
- ③母の 35 才以上の出産は事故も多いし問題児の生まれる率もふえるし、生れる子の乳児死亡率も高く、ことに父の定年退職の日に、まだ学業を終っていないから父の重荷となる。
- ④最もくらくで最も丈夫な子が生まれ、そして最も育てるのにらくなのは五月つ児だから、八月妊娠・5 月出産でうみたい。
- ⑤産んだ子のすべてに職業教育をする。その学資だけは用意したい。女児も男児も。
- ⑥人間の幸福感の最大の泉である結婚生活に障害を与えない受胎調節法でありたい。それに性感染症が最も少なく確実性トップ（米ギャンブル博士その他）のサンプーンを勧めます。

**手軽で確実な
エーザイの産制薬**

○サンプーン錠16錠 ○サンプーンループ24錠
○サンプーンセリーボ16錠 ○サンプーンS
〔資料進呈・エーザイ S 係〕 ○サンプーンファーム33 g

(43)

図 6. 1960 年代の母子健康手帳広告ページ（三重県発行）

する質問や悩みは多く、父親や祖父母に関する悩みもあると言う。家庭を訪問すると1時間以上悩みを聞きくことがあると話していた。本稿では、研究テーマである質問項目「5.子育て支援に関して、祖父母世代（または高齢者）に期待すること」だけに絞り、母子保健推進員が期待する祖父母世代の子育て支援についてみていく。

表3. 子育て支援に関して、祖父母世代（または高齢者）に期待すること

(質問5 回答者：23名、回答率：68%)

経験年数・人数	祖父母世代に期待すること
22年・1人	・遠慮せず折々に関わる機会をつくりましょう。親と異なった意見があつてもいいと思います。違った意見や考え方あることが多様な社会での活動が生きづらさを感じにくいかと思います。
10年・2人	・経験をもとに助言する。 ・昔のよい経験も伝えてもらいつつ、今の子育ても理解し一緒に見守ってもらえたたら…。
8年・1人	・地域の見守り役でいてくださいればありがとうございます。
7年・1人	・見守る。助けを求められたら応じる。助けを求めにくいようなら声掛け。
6年・2人	・子育ての仕方は年代によって違うけれど大きな心で受け止めてあげて欲しいです。 ・昔の伝承あそび、うたなど知らせる機会があれば…と思います。
5年・3人	・親の育児を否定しないこと、自分の子育てと違っても認め、自分の時代の子育てを押し付けないこと。 ・子育て世代にもっと思いやりを！ ・子どもの数が本当に少ない、子どもは未来の希望の子、地域で育てることが大切。
4年・3人	・サポートセンターのような託児。 ・一人で悩まないで、手伝えることがあれば何でもしてあげるというメッセージを送る。 ・保育園や子育て施設の建設に反対しないでください。
3年・1人	・あたたかく見守ってほしい。
1.5年・1人	・自分たちの孫でなく、よその子に関わったほうが良いのではないか。そういう場や役割があれば。
1年・4人	・「地域の子ども達は、みんなで育てよう」という気持ちでいろんな場所で繋がっていくといいと思います。 ・子育てしにくい世の中と言われています、親世代のサポートしつつ、孫との関りを充分楽しんで欲しいです。 ・祖父母世代の方も積極的な方がたくさん見えます。こういう方を大事に子育てに活かしていただきたいと思います。 ・期待する。
0年・3人	・傾聴、思いやり ・小さい子どものふれあいを持つことで相互の楽しみに。 ・昔の苦労を若い人たちに話す機会を作ってほしい。
経験年数不明・1人	・わらべうたなど教えてほしい。
回答なし12人	

(2) 結果

記述結果は表3のとおりである。「見守る(4人)」という記述が多くみられたが、母子保健推進員の経験年数順にまとめると、経験豊富な推進員からは「祖父母の経験から子育て世代に関わってもらいたい。」「今の子育てを理解し、一緒に孫育てをしてもらいたい。」「助けを求められたら応じてあげてもらいたい。」といったサポート役として関わってもらいたいという記述があった。経験が浅い推進員からは、「親世代のサポートしつつ、孫との関りを充分楽しんで欲しい。」「小さい子どものふれあいを持つことで相互の楽しみに。」「昔の苦労を若い人たちに話す機会を作ってほしい。」と、孫だけに限らず地域の子育てにも参加してもらいたいという祖父母の活躍の場が広がるような記述がみられた。

(3) 考察

母子保健推進員を対象に祖父母による子育て支援参加への期待についてだけみたが、人生の先輩である祖父母には孫育てだけでなく、地域の子どもへの支援も期待されていることがわかった。人生100年

時代と言われる現代においては、子育てサポートが祖父母世代の生きがいにも繋がるのではないか。また、子育て世代の親族に限らず、地域全体で協力して子育てをすることで、子育てしやすい、住みやすい家庭環境に繋なるということが調査をとおしてわかった。

5. まとめ

研究1では、子育て世代の悩みや祖父母世代との関係についてみたが、時代の変化とともに育児に対する考え方方が変化してきたことで、お互いに世代間ギャップを感じていることがわかった。しかし、ギャップを感じる場面があったとしても母親が頼りにしているのは、子育て経験があり、相談しやすい祖父母であることがわかった。研究2では、母子健康手帳を年代別にみたことで、記載内容から家族計画・乳幼児の健康・栄養・子どもとの接し方の考え方の違いから、世代間ギャップが生まれた原因の一つであることがわかった。研究3では、母子保健推進員を対象に子育て世代と祖父母世代の関係に関する悩みや相談ごと、祖父母に期待することを調査したが、研究1と同じように母親たちは世代間ギャップを感じながらも、子育ての先輩である祖父母の協力を必要としていることがわかった。また祖父母世代と子育て経験や年齢が変わらない母子保健推進員からは、祖父母世代はその時代にあった育児を理解し、見守る立場であってほしいという意見が多いことがわかった。女性が子育てをしながら社会で活躍していくことは容易ではないが、我々のような子育て支援に携わる者が世代間ギャップを無くすために子育ての現状や母親の気持ちを代弁することと、祖父母世代に子育て支援を呼びかけることで、母親にとって子育てしやすく、家族の協力により離職防止や就業継続に繋がるのではないかと考える。

付記

- ・研究1は、「NHK 番組アーカイブス学術利用トライアル」の成果の一部である。
- ・研究3は、津市健康福祉部健康づくり課中央保健センター協力のもと、本研究の論文化と調査結果公開について書面にて対象者である「津市母子母子保健推進員継続研修会」参加者の同意を得ている。

参考文献

- 内閣府（2019）：安倍内閣の経済財政政策 <https://www5.cao.go.jp/keizai1/abenomics/abenomics.html> (2019.10.8)
- 戸塚芳子（2017）：パパ・ママ じいじ・ばあばの子育てギャップ,扶桑社,3-4
- 内閣府（2019）：https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2019/zenbun/01pdf_index.html (2019.10.8)
- 横山徹爾（2012）：母子健康手帳の交付・活用の手引き,国立保健医療科学院,3-5
- 石垣純二（1966）：三重県母子健康手帳,43
- 津市健康福祉部健康づくり課（2018）：津市の健康づくりを支える ヘルスボランティア ささえ愛マップ,
津市健康福祉部健康づくり課,16
- NHK 番組アーカイブス（2003.4.11～2018.9.22,全 677 回放送）：番組「すくすく子育て」

原稿種別：研究論文